

修士課程・博士課程前期概要

人文科学研究科

史学専攻

1. 専修科目, 授業科目, 単位数, 担当者及び主研究内容等

※ 担当者氏名前の○印は, 令和6年度の学生募集担当者を表します。

専修科目	授業科目	単位数	担当者	主研究内容等
日本史	日本史演習	4又は8	教授 博士(文学) ○西谷 正浩	中世史を研究してきたが, とくに社会経済と思想の問題に関心をもっている。
	日本史特講Ⅱ a	2		社会・経済・思想の問題を中心に, 日本中世史の主要テーマについて講述する。
	日本史特講Ⅱ b	2		
	日本史特講Ⅱ c	2		
	日本史特講Ⅱ d	2		
	日本史史料講読 A	4		
	日本史史料講読 B	4		
	日本史演習	4又は8	教授 ○梶原 良則	近世の藩政史, 特に幕末維新期における福岡・佐賀・長州藩などの西南地域諸藩を中心として, 対外的危機と藩政改革(政治・経済・軍事改革)の問題について研究してきた。的確な研究史の整理と堅実な史料批判に基づく実証研究を目標に研究指導を行う。
	日本史特講Ⅲ a	2		
	日本史特講Ⅲ b	2		
	日本史特講Ⅲ c	2		
	日本史特講Ⅲ d	2		
	日本史史料講読 A	4		
	日本史史料講読 B	4		
	日本史演習	4又は8	教授 ○福嶋 寛之	日本近現代史に関する諸問題を扱う。「日本史演習」では, 広く「近代」という共通の舞台を設定するだけで, 参加者の研究報告を自由にしてもらう方式を進める。「日本史特講」は, 昭和戦中・戦後にかけての教育史・思想史・政治史について講義する。「日本史史料講読」では, 昭和期の基本史料をテキストとして, 情報の的確な抽出と独創的な問題の設定へと導く訓練を行う。
	日本史特講Ⅳ a	2		
	日本史特講Ⅳ b	2		
	日本史特講Ⅳ c	2		
	日本史特講Ⅳ d	2		
	日本史史料講読 A	4		
	日本史史料講読 B	4		
	日本史演習	4又は8	准教授 博士(文学) ○山田 貴司	日本史演習では, 修士論文や投稿論文の執筆, 学会発表等に向けて, 受講者各自のテーマにもとづいた研究発表を行なう。
	日本史特講Ⅵ a	2		私自身は, 西国の地域権力をフィールドに, 中世後期から江戸時代初期にかけての政治史・文化史に関心を有している。日本史特講では, 特定の人物にスポットをあてつつ, 戦国時代から桃山時代にかけてみられた政治・文化・宗教的諸事象について具体的に講義する。
	日本史特講Ⅵ b	2		
日本史史料講読 A	4			
日本史史料講読 B	4	室町時代の古記録を輪読し, 古文書の読解能力及び歴史的事象を復元・整理する力を高める。		
日本史特講Ⅰ c	2	非常勤講師 森 茂暁	【令和5年度開講】	
日本史特講Ⅰ d	2			
日本史特講Ⅴ c	2	非常勤講師 細井 浩志	【令和5年度開講】	
日本史特講Ⅴ d	2	非常勤講師 伊藤 幸司	【令和5年度開講】	
日本史特講Ⅵ c	2	非常勤講師	【令和5年度開講】	
日本史特講Ⅵ d	2	中野 等		

専修科目	授業科目	単位数	担当者	主研究内容等	
東洋史	東洋史演習	4又は8	教授 博士(文学) ○山根 直生	唐宋時代を中心とする中国史について、軍事集団と家族に着目し研究してきた。現地調査の手法と知見に学び、現在の「国家」の単位ではなく、社会経済の実態を把握するのに適当な「地域」の単位に基づいた研究を目指して指導する。	
	東洋史特講Ⅱ a	2			
	東洋史特講Ⅱ b	2			
	東洋史特講Ⅱ c	2			
	東洋史特講Ⅱ d	2			
	東洋史史料講読 A	4			
	東洋史史料講読 B	4			
	東洋史演習	4又は8	教授 ○則松 彰文	修士論文の作成へ向け、各自のテーマに基づく研究発表を随時行う他、漢文史料を使って東洋史研究の深化をはかる。	
	東洋史特講Ⅲ a	2		中国近世史とくに明清時代の中国(主対象は17～19世紀)を中心とした対外関係について考察する。当該時期の中国を中心に、対日本、東南アジア、ロシア、西ヨーロッパ諸国との間の活発な文物の交流・交易、またそれぞれにおける対外観、対外認識観等につき考察する。	
	東洋史特講Ⅲ b	2		18・19世紀世界と東アジアというテーマのもと、とくに清代中国の世界史的位置について考察する。現在、清代中国に対する歴史的評価は大きく二つに分かれているが、その両説を分析・検討することを通じて、当該世界と東アジアとの関係を再考する。	
	東洋史特講Ⅲ c	2		ここでは、中国近世史に関わる漢文史料の講読を行う。とくに、返り点などが一切付されていない白文を講読し、漢文読解力の向上を目標とする。	
	東洋史特講Ⅲ d	2			
	東洋史史料講読 A	4			
	東洋史史料講読 B	4			
西洋史	西洋史演習	4又は8	教授 ○森 丈夫	北アメリカ社会の発展を18世紀から20世紀転換期まで検討している。主として、イギリス帝国と植民地の関係を戦争や革命を通じて、また独立後の市民社会の発展をジェンダーや黒人差別の問題を通じて考えている。	
	西洋史特講Ⅳ a	2			
	西洋史特講Ⅳ b	2			
	西洋史特講Ⅳ c	2			
	西洋史特講Ⅳ d	2			
	西洋史史料講読 A	4			
	西洋史史料講読 B	4			
	西洋史演習	4又は8	准教授 博士(Ph.D.) ○渡邊 裕一	担当者は、中世後期～近世ヨーロッパにおける都市史および環境史を専門としており、近年ではさらに災害史および疫病の歴史に取り組んでいる。演習では、修士論文の作成に向け、受講者各自のテーマに基づいた研究発表を通じ、中近世ヨーロッパ史に関する研究の深化をはかる。特講では、都市史、環境史、災害史、疫病史をそれぞれテーマにし、最新の研究動向を踏まえて、担当者が専門とする南ドイツを具体事例に講義を実施する。史料講読では、中近世ヨーロッパ史に関する最新の英語文献を精読し、前近代ヨーロッパ世界に関する理解を深める。	
	西洋史特講Ⅱ a	2			
	西洋史特講Ⅱ b	2			
	西洋史特講Ⅱ c	2			
	西洋史特講Ⅱ d	2			
	西洋史史料講読 A	4			
	西洋史史料講読 B	4			
西洋史特講Ⅲ c	2	非常勤講師 星乃 治彦	【令和5年度開講】		
西洋史特講Ⅲ d	2				
考古学	考古学演習	4又は8	准教授 博士(文学) ○古澤 義久	考古学特講では、現在の韓国、北朝鮮、中国、ロシアにわたる東北アジアを対象に、新石器時代から漢代頃までの文化について扱う。これとほぼ同時期の北部九州の縄文時代から弥生時代についても触れ、交流の様相について明らかにしていく。 また、タカラガイから民国時代の貨幣まで、通時的に中国の貨幣についても扱う。経済史的な観点の他、陶磁器や文学に及ぼした影響など貨幣の文化的な側面にも着目していく。 考古学方法論では考古学の研究法のほか、文化財行政に関する諸問題についても扱う。	
	考古学特講Ⅱ a	2			
	考古学特講Ⅱ b	2			
	考古学特講Ⅱ c	2			
	考古学特講Ⅱ d	2			
	考古学方法論 A	4			
	考古学方法論 B	4			
	考古学演習	4又は8	教授 ○桃崎 祐輔	考古学演習では、受講者各自の研究テーマに基づく具体的な論文執筆、学会発表、研究助成申請書類作成など、実践を重視した発表を重ね基礎体力作りをめざす。 考古学特講では、受講者の研究テーマ・時代に関連する考古・文献・美術史・民俗・歴史地理学などの成果を複合し、地域史・ユーラシア史の立場からの叙述をめざす。地域史では、玄界灘沿岸に焦点をあて、渡来系技術と須恵器生産、馬の飼育と馬具、古墳時代の首長系譜、集落と屯倉、金属器模倣須恵器、山岳信仰遺跡、中世寺院・瓦・貿易陶磁器、幕末の火薬・蠟生産などに着目する。ユーラシア史では、弥生社会と漢王朝の通行、魏晋南北朝の工芸技術、西晋代の鏡の出現とユーラシアへの拡散、重装騎馬戦術の成立と佛教の世界宗教化、隋唐の統一と食器、墓制の転換から律令体制の確立、五代十国・宋・元の海上交通と陶磁器・鉄・銅の交易などに着目する。講義では教材プリントとパワーポイントを併用する。 考古学方法論では、学史上の代表的な論文を素材に「研究の方法」と「論理構成」について学び、さらにそこで抽出された方法をどのように資料調査や発掘調査にフィードバックしていくかを討議形式で学ぶ。	
	考古学特講Ⅲ a	2			
	考古学特講Ⅲ b	2			
	考古学特講Ⅲ c	2			
	考古学特講Ⅲ d	2			
	考古学方法論 A	4			
	考古学方法論 B	4			
	考古学特講Ⅰ c	2		非常勤講師 武末 純一	【令和5年度開講】
	考古学特講Ⅰ d	2			
	考古学特講Ⅳ c	2		非常勤講師 富岡 直人	【令和5年度開講】
	考古学特講Ⅳ d	2	非常勤講師 石田 智子		

その他の科目（担当者未定科目）

授 業 科 目	単位数	授 業 科 目	単位数
日 本 史 特 講 I a	2	東 洋 史 特 講 I a	2
日 本 史 特 講 I b	2	東 洋 史 特 講 I b	2
日 本 史 特 講 V a	2	東 洋 史 特 講 I c	2
日 本 史 特 講 V b	2	東 洋 史 特 講 I d	2
西 洋 史 特 講 I a	2	考 古 学 特 講 I a	2
西 洋 史 特 講 I b	2	考 古 学 特 講 I b	2
西 洋 史 特 講 I c	2	考 古 学 特 講 IV a	2
西 洋 史 特 講 I d	2	考 古 学 特 講 IV b	2
西 洋 史 特 講 III a	2		
西 洋 史 特 講 III b	2		
西 洋 史 特 講 V a	2		
西 洋 史 特 講 V b	2		
西 洋 史 特 講 V c	2		
西 洋 史 特 講 V d	2		

2. 履 修 方 法

- ① 学生の標準修業年限は2年とし、所定の授業科目について、合計32単位以上を修得しなければならない。
- ② 一つの専修部門を選定し、これをその学生の専修科目とする。
- ③ 専修科目の演習担当者を指導教員とし、授業科目の選択、学位論文の作成、その他研究一般についてその指導を受けなければならない。
- ④ 専修科目の演習8単位、特講8単位及び史料講読又は方法論のA、Bいずれか4単位、合計20単位を必修科目として履修し、当該又は他の専修部門の授業科目のうちから12単位以上を選択科目として履修しなければならない。
 特講a、b、c、dは授業内容を異にし、a、bとc、dは隔年で開講する。a、cは前期、b、dは後期に開講するものとする。専修科目の演習は2年間8単位の履修を原則とするが、他に選択科目として一年間4単位の履修を認めることがある。
- ⑤ 指導教員が当該学生の研究上特に必要と認めた場合は、第1項の32単位に加えて、他の専攻及び他研究科博士課程前期及び修士課程の授業科目を、12単位を限度に選択科目として履修することができる。
- ⑥ 修士の学位論文は、専修科目について提出するものとする。